

— 雜詠 —

夏

市川學瑞

一筋に街をぬけたるつばくろの高く上れり腹をみせつゝ

斷崖に近くたちたる燈臺の白くうつりて靜かなる海

三輪車乗り入れて遊ぶ子のありて山驛の朝は靜かなりけり

長雨の漸く霽れて朝の陽に羽きらめかし飛ぶつばめかな

互焼く竈をもれ出てユラ／＼と焔は赤し夏の眞午を

門川の流の音のサラ／＼とねざめの床に通ひ來るなり

芋畑の畦のしほみをぬけ出て夕べ明るく曇珠沙華咲く

夏の陽ははや此の窓にさしこみてねざめの床に蠅の飛び居り